



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	世代によるアイヌの多様性
Author(s)	野崎, 剛毅
Description	第1章
Relation	現代アイヌの生活の歩みと意識の変容 : 2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書. 小山透編著
Citation	北海道アイヌ民族生活実態調査報告 : Ainu Report, その2, 19-38
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48972
Type	departmental bulletin paper
File Information	AINUrep02_003.pdf



第1章 世代によるアイヌの多様性

野崎 剛毅

國學院大學北海道短期大学部准教授

第1節 課題の設定と調査対象者の概要

和人が当時蝦夷地と呼ばれていた北海道に進出して以降、アイヌ民族は和人と接触する中で、それまでの文化になかった貨幣経済による不当な貿易などを強要され、経済的に疲弊していった。明治政府が本格的に同化政策をうちだすと、文化・言語の禁止や強制移住、強制労働などにより、アイヌ民族の社会的地位はますます日本国内において低くなっていった。

このような状況は、時代の流れとともに徐々に改善されてはきた。北海道旧土人保護法に代表されるアイヌ民族への差別的とも称された法制度は廃止され、制度上はアイヌ民族を差別するものはなくなった。また、アイヌ民族の和人への同化がすすむことで、アイヌ民族が和人に対して特別視される要素も減少してきているだろう。しかし、北海道環境生活部や北海道大学アイヌ・先住民研究センターなどの調査により、現在でもアイヌ民族に対する不平等が様々な場面で残っていることがわかっている。

そこで、本章では、アイヌ民族の生活実態や意識が、世代でどのように変化してきたのかに注目することで、アイヌ民族をめぐる環境の変化をみていくことにする。

本章の分析視角である世代差について、基礎データを確認しておこう。調査協力者112人を、本章では「青年層」「壮年層」「老年層」の3世代に分類する。それぞれ、青年層は20代と30代で29人、壮年層は40代と50代で42人、老年層は60代以上で41人である。平均年齢は青年層が30.6歳、壮年層が49.6歳、老年層が68.4歳であり、全体では51.5歳であった。もっとも若い者は21歳(2人)、最高齢者は80歳である。

なお、調査の対象になっているが、血筋としては「和人」であるという者が、青年層に3人、壮年層に7人、老年層に6人いる。これは、「アイヌ民族」の定義が、「地域社会でアイヌの血を受け継いでいると思われる方、また、婚姻・養子縁組等によりそれらの方と同一の生計を営んでいる方」(北海道による定義)とされていることによる。本章においては、とくにことわりのない限りは彼らを含めて分析をすすめる。なお、血筋としては「和人」である16人のうち、1人(青年層女性)は養女(育ての母がアイヌ民族)であり、また1人(老年層女性)は母方祖母がアイヌの養女であったため、アイヌ家系ではあるが血は和人である。残る14人はすべて配偶者(元配偶者も含む)がアイヌ民族である。また、それとは別に血筋不明が1人いる。これは、幼児期にアイヌの養父母にもらわれたために血筋がわからないというものである。

表1-1にあるように、青年層は半数近い14人が未婚者である。既婚者が12人、結婚したが離別した者が2人、再婚者が1人である。壮年層は既婚者が増え、25人となっている一方、離別した者が9人、死別した者が3人と多くなっている。老年層は、41人の対象者全員が結婚を経験している。離別が8人、死別が6人であった。

老年層は、子どももすでに独立している場合が多く、同居家族数は3世代でもっとも少ない1.3人である。同居家族は歳が若くなるほど多くなり、青年層では3.5人であった。その分、年齢があるほど別居家族が増えており、両者をあわせた合計家族数では世代差はほとんどなかった。

表1-1 対象者の年齢、家族数、結婚の状況

単位：歳、人

	年齢	平均家族数			結婚					計
		同居	別居	合計	未婚	既婚	離別	死別	再婚	
青年	30.6	3.5	0.5	5.0	14	12	2	0	1	29
					48.3%	41.4%	6.9%	0.0%	3.4%	100.0%
壮年	49.6	2.6	1.0	4.5	3	25	9	3	2	42
					7.1%	59.5%	21.4%	7.1%	4.8%	100.0%
老年	68.4	1.3	2.4	4.7	0	22	8	6	5	41
					0.0%	53.7%	19.5%	14.6%	12.2%	100.0%
合計	51.5	2.3	1.3	4.7	17	59	19	9	8	112
					15.2%	52.7%	17.0%	8.0%	7.1%	100.0%

第2節 教育達成の世代差

小学校就学前をみると、図1-1にあるように、老年層ではどこにも通っていなかった者が41人中37人と大多数である。そもそも地元幼稚園や保育所がなかったという者も多い。壮年層では6割以上にあたる42人中27人が何らかの施設へ通っている。保育所が18人で、9人の幼稚園の倍である。青年層になると、就学前の教育・保育も広まっており、29人中、幼稚園にも保育所にも通っていないのは6.9%にあたる2人だけであった。ただし、幼稚園と保育所の比率では、幼稚園が8人（27.6%）であったのに対し保育所は19人（65.5%）と多くなっている。2005（平成17）年の北海道における5、6歳児の幼稚園・保育所在籍率は、幼稚園59.2%、保育所30.6%となっている。また、時期の開きはあるものの、このような幼稚園優位の傾向は1950年代より変わっていない。アイヌ民族の人々において幼稚園と保育所利用率の逆転現象が生じる背景には、アイヌ民族の家庭の労働状況があると考えられ、幼児教育を受ける機会が制限されていることを物語っている。

義務教育段階については、青年層、壮年層ではほぼ浸透しているといつてよい（図1-2、図1-3）。老年層では、小学校を途中でやめた者が5人いる。そのうちの4人は70代以上であり、原因は貧困や同級生、教師からのいじめであった。中学校になると、通っていない者が7人、途中でやめた者が4人とふえている。また、卒業した者でも「ほとんど通っていなかった」という者もあり、勉強をめぐる環境は厳しくなっているようである。

高等学校になると、世代の差がはっきりとわかれてくる。日本の高等学校進学率は1974年に90%を超え、ほぼ全入となった。70年代後半以降は96%前後で安定している。青年層だけでなく、壮年層も高校全入世代にあたる者が多い。しかし、図1-4からわかるように、青年層でも29人中5人、壮年層では42人中10人が高校へ進学していない。また、進学した者であっても、青年層で4人、壮年層で8人は卒業することなく中途退学をしている。老年層になると、高校へ入学した者がすでに少数派となっている。進学者は41人中10人であり、うち1人は中退している。

なお、青年層は全員が全日制に通っているが、壮年層は6人が、老年層は10人中3人が定時制であった。

大学では、壮年層、老年層はそれぞれ1人、2人しか進学していない（図1－5）。老年層の2人のうち、1人は和人であるため、アイヌ民族35人のうちで大学へ進学したのは1人だけである。なお、その1人は仕事をしながら通信制大学で講義をうけていたが、仕事が多忙になったため最終的には退学したという。壮年層では1人が札幌の四年制大学を卒業している。青年層では、現在大学生である1人を含め、10人が大学へ入学している。6人は四年制大学、4人は短期大学である。

短期大学と四年制大学を合わせた高等教育進学率は、戦後、右肩上がりが増加し1975年頃に40%弱で安定する。その後、1990年代に入り再び増加し、現在は50%を超えるに至っている。青年層は、90年代以降の再増加期に、壮年層は70年代以降の安定期に高校を卒業しており、短大・大学進学は増加傾向にあるとはいえ、和人のそれと比較するとまだ低い水準であることがわかる。

なお、高校や大学・短大以外に、専修学校へ通っていた者もいる。青年層は7人が専門学校で学んでいる。壮年層は7人が専門学校に、2人が専修学校高等課程に進学している。老年層でも、2人が、それぞれ専門課程と高等課程へ進学している。

図1－1 就学前

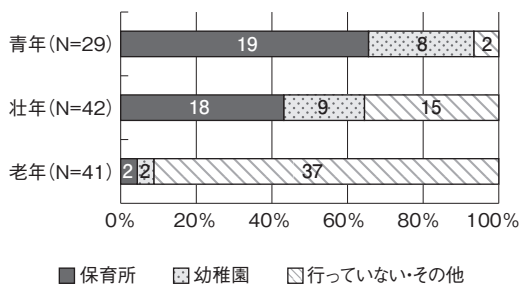


図1－2 小学校

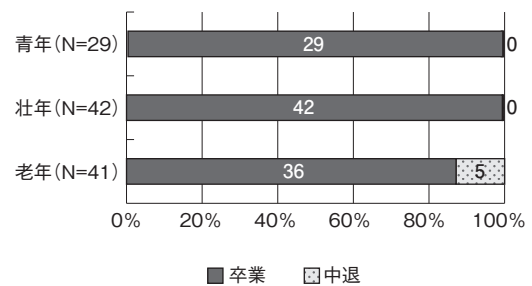


図1－3 中学校

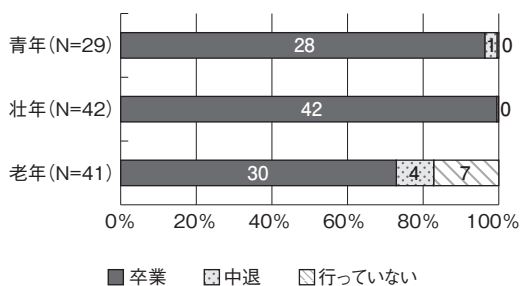


図1－4 高等学校

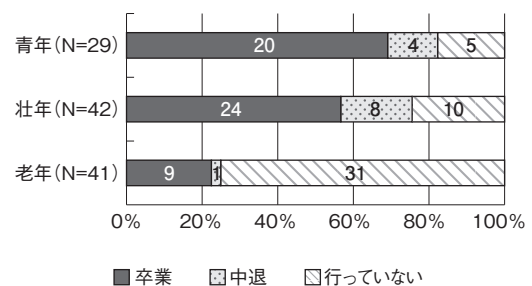
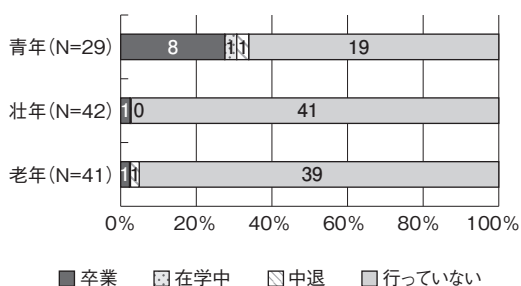


図1－5 大学



このように、アイヌ民族の人々は和人と比較して進学率が低くなっていることがわかる。では、彼らはなぜ進学しなかったのだろうか。もっと進学したかったが断念したという者は、全体の40.2%にあたる45人である(表1-2)。その割合は、年齢が高くなるほど多く、青年層では27.6%(8人)にすぎないが、壮年層では38.1%(16人)、老年層では51.2%(21人)と半数を超える。進学したかった先では、青年層では大学や専門学校が多く、また高校という者も2人いる。壮年層では大学までが9人、高校までが6人であった。老年層では、中学校(高等女学校を含む)は卒業したかったという者が6人、高校が7人、大学が3人などとなっている。

青年層において、進学を断念した理由は、

「大学に行きたかったんですよ。ただ、学力と何をやりたいかっていう、大学に見あたらなかったんで」(青年層男性)

「勉強嫌いだからな。(家族に行けと)言われた。行けないって最初から言って、(高校を)どこも受けなかったんだよ」(青年層男性)

「その時はまだ、高校へ行くより働きたいなという気持ちが大きかったから」(青年層男性)

などのように、本人の意思によるものが多い。経済的な理由を挙げた者は1人だけであり、当時は行きたいと思わなかったが、今思えば行っておけばよかったという種類の後悔が多いようである。

それが、壮年層以前では経済的な理由が主になってくる。壮年層でもっと進学したかったという16人のうち、実に13人は経済的な理由を挙げている。また、進学したかったかという質問に「いいえ」と答えた者のなかにも、「中学校を卒業するときだって、進学できるとって思っていなかったのさ。親は金を出してくれないしジジ・ババに頼るわけにいかないし」というように、もともと経済的な問題から進学を考慮できなかったという者もいた。

老年層になると、さらに事態は変わってくる。経済的な事情はもちろん残っているものの、「いじめ」の有無や、アイヌ、和人の別なく、「中学を卒業したら働くもの」という意識が人々の間に支配的であり、だれも進学を考えていなかったといった者が表れてくる。このように、経済的な問題を背景として、「進学」という選択肢がそもそもなかったという者も多いのが、壮年層・老年層の特徴といえる。

表1-2 もっと進学したかったですか 単位：人

	はい	いいえ	無回答・その他	合計
青年	8 27.6%	18 62.1%	3 10.3%	29 100.0%
壮年	16 38.1%	19 45.2%	7 16.7%	42 100.0%
老年	21 51.2%	11 26.8%	9 22.0%	41 100.0%
合計	45 40.2%	48 42.9%	19 17.0%	112 100.0%

壮年層と老年層にとって、貧困は進学を断念させる非常に大きな原因であった。彼らの子どもの頃の生活水準は、決して高いとはいえない。15歳の頃（中学校を卒業する頃）の生活ぶりを聞くと、表1-3のように、「豊かである」の10.7%、「普通」の17.9%と比較して、「苦しかった」と答えた人が全体の41.1%と際立って多い。

世代別にみると、もっとも「苦しかった」者が少ないのは青年層であるが、それでも31.0%に達している。また、青年層は「豊か」という者も6.9%ともっとも少なく、「普通」が37.9%ともっとも多かった。

もちろん、青年層と老年層とでは、「苦しかった」の内容は異なる。老年層では、

「あの当時はね、みんな困ってたから。辛いつて、親も一生懸命働いてたから、着るものだってどこが本当の（布）きれだかわからないくらい着てたから。」（老年層女性）

「けっこうそんなに、なんちゅうんだろう、どん底っちゅうわけではなかったですよ。」

（老年層女性）

「町まで行って背負子みたいなのを担いでくるのは、リンゴの少し腐ったやつ。あるでしょ。安いわけ。それを1箱ぐらい買ってきて、みんなに食べさせる。僕は下の方で、うちは12人兄弟だから。男で5番目。だから私はほとんどミカンとリンゴは皮。」（老年層男性）

などというように、衣食住に事欠くような水準の生活を送っていた人が数多くいる。その結果、学校に通えず早くから奉公へ出る人も多かった。お金はなかったが畑をもっていたので食べ物には困らなかったから、決して生活が苦しかったというわけではないという者もいる。青年層でも、電気が止められたという経験がある者、明日食べる米がないという経験をもつ者もいる。しかし、そのような貧しさが世代全体、地域全体で一般的であったのが老年世代の特徴だったといえる。

表1-3 中学校を卒業する頃のくらしぶり 単位：人

	豊か	普通	苦しい	その他	無回答	計
青年	2	11	9	7	0	29
	6.9%	37.9%	31.0%	24.1%	0.0%	100.0%
壮年	5	8	19	8	2	42
	11.9%	19.0%	45.2%	19.0%	4.8%	100.0%
老年	5	1	18	17	0	41
	12.2%	2.4%	43.9%	41.5%	0.0%	100.0%
合計	12	20	46	32	2	112
	10.7%	17.9%	41.1%	28.6%	1.8%	100.0%

このような、アイヌ民族全体の貧困が進学を断念させ、それによって生じる教育達成の差がまた貧困を再生産していくという構造が、ある一定の年齢層以上においては現実であった。このような再生産構造を断ち切るため、アイヌ民族の生活水準の向上や和人との生活格差是正などをめざす北海道ウタリ対策が1974年から4次にわたり実施された。その一環として、アイヌ子弟に対する就学援助金制度も成立した。表1-4をみると、この制度を利用した者（本人に限定）は、全体で21.4%にあたる24人である。とくに青年層では利用者が48.3%に達しており、進学を断念する理由から「経済的な問題」を排除するうえで効果があったと考えられる。なお、この就学援助を利用しなかった者の理由としては、経済的に困っていなかったから、もしくは制度自体を知らなかったからという者が多くなっている。本人は使用していないが、弟妹は使用しているという者もいた。東京に住んでいたために援助をうけることができず、「北海道は恵まれている」という感想をもつ者もいる。

壮年層以前では、制度自体を知らなかったという者が圧倒的に多くなっている。また、ウタリ協会（当時）に入っていなかったために利用できなかったという者も多かった。

なお、ウタリ対策就学援助に関しては、利用していたはずだが親が使っていたという者もいた。奨学金という形で就学支援をすることの難しさを示しているといえる。

表1-4 ウタリ対策就学援助 単位：人

	あり	なし	無回答	計
青年	14	13	2	29
	48.3%	44.8%	6.9%	100.0%
壮年	10	30	2	42
	23.8%	71.4%	4.8%	100.0%
老年	0	29	12	41
	0%	70.7%	29.3%	100.0%
合計	24	72	16	112
	21.4%	64.3%	14.3%	100.0%

第3節 職業と経済

アイヌ民族の教育問題に関しては、貧困が大きな影響力をもっていることがわかった。本節では、貧困の再生産構造を把握するために、職業と年収について確認することにする。

表1-5で初職をみると、全体ではサービス職業従事者が25.0%、生産工程従事者が21.4%と多い。また、世代的にみれば青年層ではサービス職業従事者が34.5%と3分の1に達しており、老年層では農林漁業が29.3%と最も多くなっている。具体的には、技能工・生産工程にかかわる職業では、工場のほか、建築、土木にかかわる職業に就いた者が多い。サービスの職業は、飲食店のホール係（ウェ이터、ウェイトレス）が多いほか、美容師・理容師が8人いることが特色といえる。初職で専門職に就いた者は全体でも7人しかおらず、それも看護師が4人、教師と介護福祉士、保育士がそれぞれ1人ずつであった。

初職の時点で、ブルーカラー職が圧倒的に多く、ホワイトカラー職が極端に少ないという特徴を持っていることがわかる。また、産業の転換にあわせて、初職が農林漁業から工業、そしてサービス業へと移っている。

表1-5 世代別初職

単位：人

	専門的・技術的 職業	事務従事者	販売従事者	サービス職業 従事者	保安職業 従事者	農林漁業 従事者	生産工程 従事者
青年	2	1	2	10	1	3	6
	6.9%	3.4%	6.9%	34.5%	3.4%	10.3%	20.7%
壮年	2	6	3	11	1	3	11
	4.8%	14.3%	7.1%	26.2%	2.4%	7.1%	26.2%
老年	3	1	4	7	1	12	7
	7.3%	2.4%	9.8%	17.1%	2.4%	29.3%	17.1%
合計	7	8	9	28	3	18	24
	6.3%	7.1%	8.0%	25.0%	2.7%	16.1%	21.4%

	輸送・機械運転 従事者	建設・採掘 従事者	運搬・清掃・包装等 従事者	不明	合計
青年	2	0	1	1	29
	6.9%	0.0%	3.4%	3.4%	100.0%
壮年	0	2	2	1	42
	0.0%	4.8%	4.8%	2.4%	100.0%
老年	1	4	1	0	41
	2.4%	9.8%	2.4%	0.0%	100.0%
合計	3	6	4	2	112
	2.7%	5.4%	3.6%	1.8%	100.0%

彼らは、現在にいたるまでに多くの転職を経験している。現職をみると、表1-6にあるようにもっとも多いのは「無職」であり、35.7%にあたる40人が該当する。その半数以上は老年層の定年退職者であるが、青年層においても4分の1にあたる7人が無職であることは、注目に値するだろう。うち2人は専業主婦、1人は大学生であるが、なお4人が失業中である。壮年層も8人が無職（うち3人は専業主婦）となっており、働き盛りである年代でも失業者が多くなっている。

世代別に見てみると、青年層は様々な職業に就いていることがわかる。しかし、ブルーカラーが多いという点では初職と変わらない。壮年層は専門的・技術的職業が5人ともっとも多い。ネットワーク構築から調査技師、芸術家、介護職などバラエティにとんでいる。農林水産の職業は、初め別の職業に就いていた者が実家や地域の職業を継ぐという経緯が多いようである。

初職と現職を通していえることは、大企業ホワイトカラーとしてキャリアアップをしていくという経路がほとんどないことである。現職をみても、管理的職業はひとりだけであり、それもビルオーナーであった。また、専門的・技術的職業はアイヌ工芸家が多く、これも収入という点ではあまり高いものではない。これらから、アイヌ民族の人々が安定的な職業や、高給を得られる職業にあまりついていないことがわかる。

では、具体的に彼らの収入はどのくらいであるのか。表1-7のように、平均年収は199.5万円である。もっとも低いのは青年層であり、無職の者が多いこと、働いていても100～200万円の категорияが31.0%ともっとも多くなっていることなどから、166.0万円となっている。次いで、老年層が177.1万円となっているが、これは1人だけ1,000万円以上という際だって高い者がいる影響であり、これを外れ値として除外すると151.5万円と青年層より低くなる。無職者が多いこと、

年金生活者が多いことなどが影響している。

もっとも高いのは壮年層である。それでも241.0万円であり、決して高い水準であるとはいえない。

なお、表1－8には男性だけの年収を示した。それをみると、男性全体で247.3万円、壮年層で426.7万円、老年層で258.3万円などと高く、とくに壮年層では185.7万円も増えている。しかし、男性だけに限ってみても、青年層は164.7万円と、女性とほぼ同水準である。経済難がとくに青年層において大きな問題となっていることがわかる。

表1－9の世代別世帯年収では、青年層でも平均値が440.0万円と大幅にあがっている。これは、親と同居している者が多いためである。逆に、同居者からの援助が期待できない老年層が世帯収入では285.0万円ともっとも低くなっている。

表1－6 世代別現職

単位：人

	管理的職業	専門的・技術的職業	事務従事者	販売従事者	サービス職業従事者	保安職業従事者	農林漁業従事者
青年	0 0.0%	1 3.4%	4 13.8%	7 24.1%	2 6.9%	0 0.0%	2 6.9%
壮年	0 0.0%	5 11.9%	5 11.9%	3 7.1%	6 14.3%	1 2.4%	6 14.3%
老年	1 2.4%	4 9.8%	0 0.0%	3 7.3%	0 0.0%	0 0.0%	5 12.2%
合計	1 0.9%	10 8.9%	9 8.0%	13 11.6%	8 7.1%	1 0.9%	13 11.6%

	生産工程従事者	輸送・機械運転従事者	建設・採掘従事者	運搬・清掃・包装等従事者	無職	不明	合計
青年	2 6.9%	1 3.4%	1 3.4%	2 6.9%	7 24.1%	0 0.0%	29 100.0%
壮年	1 2.4%	0 0.0%	4 9.5%	2 4.8%	8 19.0%	1 2.4%	42 100.0%
老年	1 2.4%	0 0.0%	0 0.0%	2 4.9%	25 61.0%	0 0.0%	41 100.0%
合計	4 3.6%	1 0.9%	5 4.5%	6 5.4%	40 35.7%	1 0.9%	112 100.0%

表1-7 世代別年収

単位：人

	なし	100万円 未満	100～ 200万円	200～ 300万円	300～ 400万円	400～ 500万円	500～ 600万円	600～ 700万円	700～ 800万円	800～ 900万円
青年	4 13.8%	2 6.9%	9 31.0%	8 27.6%	2 6.9%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
壮年	7 16.7%	4 9.5%	9 21.4%	7 16.7%	6 14.3%	1 2.4%	2 4.8%	1 2.4%	1 2.4%	0 0.0%
老年	5 12.2%	11 26.8%	7 17.1%	4 9.8%	6 14.6%	1 2.4%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
合計	16 14.3%	17 15.2%	25 22.3%	19 17.0%	14 12.5%	2 1.8%	2 1.8%	1 0.9%	1 0.9%	0 0.0%

	900～ 1,000万円	1,000万円 以上	不明・ 無回答	合計	平均
青年	0 0.0%	0 0.0%	4 13.8%	29 100.0%	166.0万円
壮年	0 0.0%	1 2.4%	3 7.1%	42 100.0%	241.0万円
老年	0 0.0%	1 2.4%	6 14.6%	41 100.0%	177.1万円
合計	0 0.0%	2 1.8%	13 11.6%	112 100.0%	199.5万円

表1-8 世代別年収：男性のみ

単位：人

	なし	100万円 未満	100～ 200万円	200～ 300万円	300～ 400万円	400～ 500万円	500～ 600万円	600～ 700万円	700～ 800万円	800～ 900万円
青年	2 11.8%	1 5.9%	2 11.8%	7 41.2%	2 11.8%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
壮年	1 5.9%	0 0.0%	0 0.0%	4 23.5%	4 23.5%	1 5.9%	2 11.8%	1 5.9%	1 5.9%	0 0.0%
老年	1 4.5%	4 18.2%	3 13.6%	3 13.6%	5 22.7%	1 4.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
合計	4 7.1%	5 8.9%	5 8.9%	14 25.0%	11 19.6%	2 3.6%	2 3.6%	1 1.8%	1 1.8%	0 0.0%

	900～ 1,000万円	1,000万円 以上	不明・ 無回答	合計	平均
青年	0 0.0%	0 0.0%	3 17.6%	17 100.0%	164.7万円
壮年	0 0.0%	1 5.9%	2 11.8%	17 100.0%	426.7万円
老年	0 0.0%	1 4.5%	4 18.2%	22 100.0%	258.3万円
合計	0 0.0%	2 3.6%	9 16.1%	56 100.0%	247.3万円

表1-9 世代別世帯年収

単位：人

	なし	100万円 未満	100～ 200万円	200～ 300万円	300～ 400万円	400～ 500万円	500～ 600万円	600～ 700万円	700～ 800万円	800～ 900万円
青年	0 0.0%	1 3.4%	2 6.9%	2 6.9%	6 20.7%	1 3.4%	4 13.8%	1 3.4%	2 6.9%	0 0.0%
壮年	1 2.4%	0 0.0%	5 11.9%	6 14.3%	9 21.4%	4 9.5%	2 4.8%	1 2.4%	5 11.9%	1 2.4%
老年	1 2.4%	5 12.2%	5 12.2%	6 14.6%	8 19.5%	3 7.3%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 2.4%
合計	2 1.8%	6 5.4%	12 10.7%	14 12.5%	23 20.5%	8 7.1%	6 5.4%	2 1.8%	7 6.3%	2 1.8%

	900～ 1,000万円	1,000万円 以上	不明・ 無回答	合計	平均
青年	0 0.0%	1 3.4%	9 31.0%	29 100.0%	440.0万円
壮年	0 0.0%	4 9.5%	4 9.5%	42 100.0%	467.1万円
老年	0 0.0%	1 2.4%	11 26.8%	41 100.0%	285.0万円
合計	0 0.0%	6 5.4%	24 21.4%	112 100.0%	398.9万円

第4節 民族意識とアイデンティティ

次に、アイヌ民族の人々が、どのような民族意識をもっているのかをみていこう。

まず、アイヌ民族の人々が子どもの頃どのような生活を送っていたのかから確認をする。表1-10をみると子どもの頃に他のアイヌ民族の人々と交流があった者は全体の4人に3人にあたる85人である。これは世代差が大きく、壮年層や老年層の8割がアイヌ民族との交流を経験しているが、青年層では62.1%となっている。また、老年層は集落全体にアイヌ民族が多かったという人が多い一方で、青年層ではイベントなどで出会ったという人が多く、自然な交流は数字以上に少ないようである。

一方、アイヌ民族以外の人との交流では、かかわりがなかったという人はほとんどいない。壮年層では仲良く付き合っていたという人が31人（73.8%）と最も多くなっている。青年層と老年層でも仲良く付き合っていたという人がそれぞれ17人（58.6%）、21人（51.2%）と半数を超えている。だが、「いじめられていた」という人も、それぞれ6人（20.7%）、12人（29.3%）と多くなっている。いじめの内容は、たとえば以下のものであった。

「でもその人も本気で言ってるんじゃないだろうけど、喧嘩した時にはバカにされたことはあります。アイヌって言われて。ア、イヌだって言われて。」（青年層男性）

「ばかにしたような言葉で使っているっていうんですね。（略）ただ、ばかにした言葉で。アイヌじゃない子にも、アイヌって言っていたと思います。（略）『アイヌ』とか『ネギ』と

か言われている子がいました」(壮年層男性)

「そのいじめられてた子っていうのは、男の子も女の子も関係なくいじめられてた。(略)先生だらなんもゆったりしなかったような気がするな」(老年層男性)

「一緒に学校に行けば、アイヌ、アイヌといじめられる。だからそういったような周りじゃなくて、今日私がやられたら、明日は違う女の子がする(いじめられる)とか。またその次の日は違う子どもとか。今のようないじめではなかった。ただ、アイヌ、アイヌという。街なんかだと、『アイスクリーム』と書いてあると、『アイヌクリーム、アイヌクリーム』とか。(略)我々の部落にたまたまシャモが来て喧嘩したら、何だこのシャモ、シャモっていじめましたから。いじめられたばかりではないです。数が多かったら、少ないものをするという」(老年層男性)

表1-10 子どもの頃のアイヌ民族の交流

単位：人

	アイヌ民族との交流	アイヌ民族以外の人との交流							合計
		仲良く付き合っていた	よくけんかをしていた	いじめられていた	いじめた	かかわりがなかった	その他	無回答	
青年	18	17	1	6	1	1	1	2	29
	62.1%	58.6%	3.4%	20.7%	3.4%	3.4%	3.4%	6.9%	100.0%
壮年	34	31	2	2	0	0	4	3	42
	81.0%	73.8%	4.8%	4.8%	0.0%	0.0%	9.5%	7.1%	100.0%
老年	33	21	1	12	0	0	2	5	41
	80.5%	51.2%	2.4%	29.3%	0.0%	0.0%	4.9%	12.2%	100.0%
合計	85	69	4	20	1	1	7	10	112
	75.9%	61.6%	3.6%	17.9%	0.9%	0.9%	6.3%	8.9%	100.0%

ここで、血筋がアイヌ民族である者に限って、いつ頃民族意識が生まれたのかをみておこう。彼らの多くは、自分自身がアイヌ民族の一員であることをかなり早い時期に自覚している。半数近くに当たる45人は小学校低学年までに民族の自覚をしている。一方で高校を卒業してからという人は18.4%にあたる18人である。これは、世代が若くなるほど多くなっている。青年層では「自然に」という人も18.5%と他の世代より多い。

上述のいじめ経験などもあわせて考えると、上の世代ほど小さい頃からアイヌ民族であることを自覚する、あるいは自覚せざるをえない状況にさらされており、それが徐々に弱まってきていることが予想される。

自覚をするに至ったきっかけの多くは、アイヌ文化(25.5%)や、親(22.4%)あるいは家族・親戚(19.4%)、友人らからの指摘(23.5%)である(表1-12)。そのようななかで、青年層は親から聞いたという者が33.3%と多くなっているのに対し、老年層ではその割合が8.3%と低くなっている点が目を引く。逆に、友人などからの指摘を挙げる者が、老年層では30.6%であるのに対し、青年層では18.5%と10ポイント以上低くなっている。青年層では、親からの他に「自然と自覚した」という者も多い(29.6%)。一方、老年層は「友人他から」のほか、いじめられることによりアイ

ヌであることを自覚させられたという人が22.2%と多くなっている。

これらを整理すれば、青年層では親や雰囲気などのような、身近な存在から自然と伝わるという自覚のされ方が多い。それに対し老年層では、アイヌ民族としての自覚は負の経験をともなっていることが多い。たとえば友人からのいじめや学校・地域における差別経験、また、主に毛深さに代表される外見上の特徴の認識である。

なお、壮年層は「アイヌ文化」によって自覚したという人がふえている（37.1%）。他の世代に比べて、積極的にアイヌであることを知ろうとしたことが想像される。

表1-11 自分がアイヌ民族の一人であることを自覚した時期はいつ頃ですか

単位：人

	生まれた時から	小学校入学前	小学低学年	小学高学年	中学校	中卒業後、高校	高卒から20代	30代以降	自然に	無回答	計
青年	0 0.0%	2 7.4%	7 25.9%	2 7.4%	1 3.7%	3 11.1%	6 22.2%	0 0.0%	5 18.5%	1 3.7%	27 100.0%
壮年	2 5.7%	5 14.3%	7 20.0%	6 17.1%	2 5.7%	1 2.9%	4 11.4%	2 5.7%	5 14.3%	1 2.9%	35 100.0%
老年	2 5.6%	10 27.8%	10 27.8%	3 8.3%	4 11.1%	0 0.0%	4 11.1%	1 2.8%	2 5.6%	0 0.0%	36 100.0%
合計	4 4.1%	17 17.3%	24 24.5%	11 11.2%	7 7.1%	4 4.1%	14 14.3%	3 3.1%	12 12.2%	2 2.0%	98 100.0%

表1-12 アイヌ民族の一人であることを自覚したきっかけ

単位：人

	親から	家族親戚から	友人他から	アイヌ文化	周りの環境	結婚	アイヌ協会関係	外見	いじめられた	自然に
青年	9 33.3%	3 11.1%	5 18.5%	4 14.8%	2 7.4%	1 3.7%	2 7.4%	1 3.7%	1 3.7%	8 29.6%
壮年	10 28.6%	7 20.0%	7 20.0%	13 37.1%	3 8.6%	2 5.7%	2 5.7%	4 11.4%	1 2.9%	5 14.3%
老年	3 8.3%	9 25.0%	11 30.6%	8 22.2%	3 8.3%	3 8.3%	2 5.6%	7 19.4%	8 22.2%	4 11.1%
合計	22 22.4%	19 19.4%	23 23.5%	25 25.5%	8 8.2%	6 6.1%	6 6.1%	12 12.2%	10 10.2%	17 17.3%

	覚えていない	自覚していない	その他	合計
青年	2 7.4%	3 11.1%	3 11.1%	27 100.0%
壮年	0 0.0%	2 5.7%	5 14.3%	35 100.0%
老年	0 0.0%	0 0.0%	3 8.3%	36 100.0%
合計	2 2.0%	5 5.1%	11 11.2%	98 100.0%

自らをアイヌ民族の一員として意識するのはどのようなときか。表1-13をみると、もっとも多いのは、そもそも意識をしていないという回答で、全体の30.5%であった。若いほど、民族を意識しない人は増えており、老年層では13.2%にすぎないものが、壮年層では30.8%、青年層では53.6%と過半数に達している。

民族を意識する場面としては、「アイヌ文化、活動などをする時」(28.8%)と「いじめられた時、差別された時」(27.4%)が多い。「アイヌ文化」は、老年層では15.2%にすぎないが、壮年層では33.3%、青年層では53.8%に達している。それとは逆に、「いじめ、差別」では青年層は7.7%であるのが、壮年層では14.8%、老年層では45.5%と半数近くになっている。また、青年層では「両親や祖父母の影響」が30.8%と他の世代と比較して多くなっている。先に見たように、老年層では負の経験とともにアイヌ意識が植えつけられ、青年層では親やアイヌ協会などの働きかけなどが意識の醸成に役割を果たしている。

このような意識の違いは、今後の生き方に関する考え方にも表れてくる。表1-14からわかるように、年齢があがるにつれて、アイヌとして積極的に生きていきたいと考える人の割合は上がっていく。青年層でその割合は17.2%であるが、壮年層では28.6%、老年層では34.1%である。かといって、青年層はアイヌであることを隠して生きていきたいわけでもない。アイヌであることを知られずに生活したいと考えているのは青年層で1人、壮年層で2人の計3人いるだけである。

このように、アイヌ文化との接点はとくに若い世代の民族意識に少なくない影響力をもっている。次節ではこのアイヌ文化について、もう少し掘り下げてみよう。

表1-13 普段自分をアイヌ民族として意識する場面

単位：人

	意識しない	意識する（「意識する」者を分母とした割合）					
			いつも意識する	両親や祖父母の影響	周りの環境	いじめられた時、差別された時など	外見
青年	15	13	0	4	1	1	3
	53.6%	46.4%	0.0%	30.8%	7.7%	7.7%	23.1%
壮年	12	27	3	1	3	4	4
	30.8%	69.2%	11.1%	3.7%	11.1%	14.8%	14.8%
老年	5	33	2	2	9	15	6
	13.2%	86.8%	6.1%	6.1%	27.3%	45.5%	18.2%
合計	32	73	5	7	13	20	13
	30.5%	69.5%	6.8%	9.6%	17.8%	27.4%	17.8%

	意識する（「意識する」者を分母とした割合）						合計
	アイヌ文化、活動などをする時	アイヌ協会（イベント、支援）	仕事	冠婚葬祭の時	ニュースなどの報道	その他	
青年	7	3	0	0	3	5	28
	53.8%	23.1%	0.0%	0.0%	23.1%	38.5%	100.0%
壮年	9	5	5	2	1	4	39
	33.3%	18.5%	18.5%	7.4%	3.7%	14.8%	100.0%
老年	5	2	1	0	1	3	38
	15.2%	6.1%	3.0%	0.0%	3.0%	9.1%	100.0%
合計	21	10	6	2	5	12	105
	28.8%	13.7%	8.2%	2.7%	6.8%	16.4%	100.0%

表1-14 今後の生活について

単位：人

	アイヌとして積極的に生きていきたい	とくに民族は意識せずに生活したい	極力アイヌであることを知られずに生活したい	その他	無回答	合計
青年	5 17.2%	19 65.5%	1 3.4%	4 13.8%	0 0.0%	29 100.0%
壮年	12 28.6%	23 54.8%	2 4.8%	4 9.5%	1 2.4%	42 100.0%
老年	14 34.1%	18 43.9%	0 0.0%	8 19.5%	1 2.4%	41 100.0%
合計	31 27.7%	60 53.6%	3 2.7%	16 14.3%	2 1.8%	112 100.0%

第5節 アイヌ文化への意識

表1-15は、子どもの頃、自身が体験したアイヌ文化である。これをみると、「入れ墨や耳輪」をしていた人を見たという人が33.0%と最も多くなっている。とくに老年層では51.2%と半数以上がそのような人を見たことがあるという。実際にしていたのは、壮年層や老年層の人々からみて祖母や曾祖母がほとんどである。続いて多いのは「アイヌ語」を話す人で26.8%、「イナウ・ヌササン」（イナウ＝木幣、ヌササン＝祭壇）で20.5%などである。アイヌ語については、壮年層、老年層の祖父母世代では、まだ日常会話で使用していた人がいたという。

表1-15 子どもの頃のアイヌ体験

単位：人

	アイヌ語	入れ墨 耳輪	熊猟 サケ漁	囲炉裏 チセ	宝物	イナウ ヌササン	先祖供養	動物送り	トゥスクル	N
青年	5 17.2%	1 3.4%	1 3.4%	0 0.0%	2 6.9%	1 3.4%	2 6.9%	0 0.0%	1 3.4%	29 100.0%
壮年	9 21.4%	15 35.7%	4 9.5%	7 16.7%	8 19.0%	9 21.4%	7 16.7%	3 7.1%	3 7.1%	42 100.0%
老年	16 39.0%	21 51.2%	6 14.6%	9 22.0%	10 24.4%	13 31.7%	13 31.7%	6 14.6%	6 14.6%	41 100.0%
合計	30 26.8%	37 33.0%	11 9.8%	16 14.3%	20 17.9%	23 20.5%	22 19.6%	9 8.0%	10 8.9%	112 100.0%

子どもの頃、自身が体験したアイヌ文化は、年齢が下がるにつれて着実に減ってきている。青年層においては、アイヌ語を話す人がいたという者が17.2%（5人）と他の体験に比較してやや多くなっているほかは、1、2人が体験したことがあるのみである。いずれかの体験をしたことがある者も29人中8人しかおらず、72.4%にあたる21人はアイヌ文化をまったく体験していない。この、アイヌ文化未体験率は、壮年層では40.5%、老年層では24.4%と下がっていく。

現在、実践している、あるいは心がけているアイヌ文化では、「アイヌ工芸」（24.1%）や「カムイノミなどの祭事」（22.3%）、「歌と踊り」（17.0%）などの活動が多い（表1-16）。体験した者の多い「アイヌ語」は12.5%である。「まじない・トゥス」（1人）や「動物や物の霊送り」（2人）、「海・山・川でのタブーや約束事」（3人）、「神聖な場所への祈り」（8人）のように、霊的・精神的なものがかわってくる文化は、手軽にできず、また敷居も高くなるためか、実施者が少なくなっている。

ただし、現在のアイヌ文化の実践については、「とくにしていない」者が33.9%と一番多いことは確認しておかなければならない。とくに青年層では51.7%と過半数が、何も実践あるいは心がけていない。とくに何もしていない者の割合は、年齢層が上がるに連れて減少していくが、壮年層では31.0%が、老年層でも24.4%と4人に1人が、アイヌ文化と接することのない生活を送っている。

しかし、このような状況は、青年層においてアイヌ文化に対する意識がなくなりつつあることを意味するのではない。今後関わってみたいアイヌ文化を聞くと、青年層も含めて多くの者が、何らかの活動に関心を示していることがわかるからである。

もっとも関心をひいているのは、表1-17にあるように「工芸」である(39.3%)。続いて、「歌と踊り」(31.3%)、「アイヌ語」(28.6%)、「アイヌ料理」(18.8%)などのように、身近で、個人でもできるような文化が、多くの者から今後関わってみたいと考えられている。その一方で、現在の実践と同様、霊的・精神的な要素の強い儀礼などは「伝統的な葬儀・先祖供養」(13.4%)を除いては低くなっている。

これらアイヌ文化のいずれにも関わる気のない者、いわば「無関心者」の割合は、全体で13.4%である。そして、無関心者率には世代差が小さい。老年層では14.6%、壮年層では9.5%、そして青年層でも17.2%である。幼少期にアイヌ文化を体験する機会がなく、また現時点でも関わる事ができていない者が多い青年層であるが、将来的には、アイヌ文化に関わっていきたいと考えている者が多い。

アイヌ文化に対する思いは、国や道に望む政策からもうかがうことができる。表1-18をみると、国や道に望む政策で多いのは「学校教育にアイヌ民族のことを盛り込む(学校教育)」(55.4%)、「アイヌ子弟の大学への進学機会を拡大する(進学機会)」(55.4%)、「働く場所や機会を提供し、自立できるようにする(労働機会)」(46.4%)、「工芸織物技術が受け継がれるように技術の向上、人材育成を図る(工芸織物)」(41.1%)、「アイヌ民族について研究する組織を作り、アイヌ民族出身の研究者を養成する(アイヌ研究)」(40.2%)、「アイヌ語・アイヌ文化に触れることができる機会を増やす(アイヌ語・文化)」(39.3%)などである。

これを世代別にみても、興味深い傾向が表れる。老年層では「国会や道議会にアイヌ民族特別議席を設ける(特別議席)」が53.7%と、全体の34.8%と比較してかなり高くなっている。また、「アイヌ民族と国がアイヌ政策を協議する場を設ける(政策協議)」は、壮年層が40.5%、老年層が41.5%であり、青年層の27.6%と比較して高くなっているほか、壮年層は「進学機会」が78.6%と青年層(37.9%)や老年層(43.9%)より多い。

それに対し、青年層をみると、「学校教育」(58.6%)や「アイヌ語・文化」(41.4%)、「アイヌ研究」(44.8%)などが他の世代と同程度であり、「工芸織物」(48.3%)や「観光を盛んにしてアイヌ文化が国内・世界に広く知られるようにする」(51.7%)が他より多くなっている。そして、「進学機会」(37.9%)や「労働機会」(34.5%)、「政策協議」(27.6%)、「特別議席」(17.2%)が壮年層、老年層よりも低くなっている。

ここからは、青年層のアイヌ文化に対する肯定的な意識と、国内においてアイヌ民族を特別な存在とすることへの抵抗感がみてとれる。文化を振興し、外部へ発信することの重要性は意識している。しかし、

(進学機会)「それだったら逆に勉強しなくなるんじゃないですかね。卒を決めちゃうと。」

(青年層男性)

(進学機会)「なんでアイヌだからこういうお金を。(略) 和人の人の中にもそういう人(引用者注一貧しくて進学できない人) がないわけじゃないでしょ? じゃあなんでこの、どうなのかなと思う、これは」(青年層男性)

(労働機会)「僕はなくていいと思います。あったらそれこそ、差別になるのではないか」

(青年層男性)

(特別議席)「他の民族というか、各地の差別されている人たちの議席がないにもかかわらず、アイヌだけ特別に議席が用意されるっていうのは。そしたら沖縄の人は何て言うのっていう話にもなってしまいうし。なので、平等に、やりたい奴が国を仕切ればいいんじゃないかと思います。これを利用して世に出ようっていう考えの方が逆に嫌ですね。アイヌだからどうしようとかこうしようとかいう」(青年層男性)

(特別議席)「特別議席っていうのが何か。特別っていうのが逆に何か差別みたいですよ。逆差別みたいに思えるんですけど。」(壮年層女性)

表1-16 普段実践している、心がけているアイヌ文化はありますか

単位：人

	ない	ある	動物や物の 霊送り	カムイノミ などの祭 事	伝統的な 婚礼・地 鎮祭・新 築祝い	伝統的な 葬儀・先 祖供養	イナウを 捧げる	神聖な場 所への祈 り	海・山・川 でのタブー や約束事	まじない・ トウス
青年	15 51.7%	13 44.8%	0 0.0%	5 17.2%	0 0.0%	3 10.3%	1 3.4%	2 6.9%	0 0.0%	0 0.0%
壮年	13 31.0%	28 66.7%	1 2.4%	8 19.0%	2 4.8%	3 7.1%	1 2.4%	3 7.1%	2 4.8%	1 2.4%
老年	10 24.4%	29 70.7%	1 2.4%	12 29.3%	2 4.9%	6 14.6%	6 14.6%	3 7.3%	1 2.4%	0 0.0%
合計	38 33.9%	70 62.5%	2 1.8%	25 22.3%	4 3.6%	12 10.7%	8 7.1%	8 7.1%	3 2.7%	1 0.9%

	夢見を大 事にする	アイヌ語	ユカラな ど口承文 芸	歌と踊り	工芸	料理	アイヌ協 会イベント に参加	これら以 外のアイヌ 文化	無回答	N
青年	2 6.9%	4 13.8%	2 6.9%	4 13.8%	2 6.9%	2 6.9%	2 6.9%	4 13.8%	1 3.4%	29 100.0%
壮年	2 4.8%	7 16.7%	4 9.5%	6 14.3%	12 28.6%	8 19.0%	9 21.4%	2 4.8%	1 2.4%	42 100.0%
老年	2 4.9%	3 7.3%	3 7.3%	9 22.0%	13 31.7%	6 14.6%	4 9.8%	6 14.6%	2 4.9%	41 100.0%
合計	6 5.4%	14 12.5%	9 8.0%	19 17.0%	27 24.1%	16 14.3%	15 13.4%	12 10.7%	4 3.6%	112 100.0%

表1-17 かかわってみたいと考えているアイヌ文化はありますか

単位：人

	動物や物の 霊送り	カムイノミ などの祭 事	伝統的な 婚礼・地 鎮祭・新 築祝い	伝統的な 葬儀・先 祖供養	イナウを 捧げる	神聖な場 所への祈 り	海・山・川 でのタプー や約束事	まじない・ トウス(巫 術)	夢見を大 事にする
青年	1 3.4%	2 6.9%	1 3.4%	1 3.4%	1 3.4%	2 6.9%	2 6.9%	0 0.0%	3 10.3%
壮年	2 4.8%	5 11.9%	2 4.8%	7 16.7%	1 2.4%	1 2.4%	5 11.9%	1 2.4%	3 7.1%
老年	3 7.3%	7 17.1%	3 7.3%	7 17.1%	5 12.2%	1 2.4%	3 7.3%	0 0.0%	0 0.0%
合計	6 5.4%	14 12.5%	6 5.4%	15 13.4%	7 6.3%	4 3.6%	10 8.9%	1 0.9%	6 5.4%

	アイヌ語	ユカラな ど口承文 芸	歌と踊り・ 楽器	工芸(編 み物・刺繍 ・織物・木 彫)	伝統的狩 猟・農法・ 漁法	料理	これら以 外のアイヌ 文化	その他	N
青年	6 20.7%	2 6.9%	8 27.6%	12 41.4%	3 10.3%	4 13.8%	4 13.8%	3 10.3%	29 100.0%
壮年	14 33.3%	5 11.9%	14 33.3%	19 45.2%	4 9.5%	10 23.8%	9 21.4%	6 14.3%	42 100.0%
老年	12 29.3%	2 4.9%	13 31.7%	13 31.7%	2 4.9%	7 17.1%	8 19.5%	5 12.2%	41 100.0%
合計	32 28.6%	9 8.0%	35 31.3%	44 39.3%	9 8.0%	21 18.8%	21 18.8%	14 12.5%	112 100.0%

表1-18 国や北海道に望むアイヌ政策

単位：人

	学校教育にア イヌ民族のこ とを盛り込む	アイヌ子弟の 大学への進学 機会を拡大す る	アイヌ語・ア イヌ文化に触 れることが出 来る機会を増 やす	地名をアイヌ 語で表記する	工芸織物技術 が受け継がれ るように技術 の向上、人材 育成を図る	観光を盛んに してアイヌ文 化が国内・世 界に広く知ら れるようにす る	働く場所や機 会を提供し、 自立できるよ うにする	自治体と協力 し、アイヌ文 化を通じて地 域を活性化さ せる
青年	17 58.6%	11 37.9%	12 41.4%	5 17.2%	14 48.3%	15 51.7%	10 34.5%	11 37.9%
壮年	22 52.4%	33 78.6%	16 38.1%	10 23.8%	17 40.5%	14 33.3%	21 50.0%	11 26.2%
老年	23 56.1%	18 43.9%	16 39.0%	8 19.5%	15 36.6%	15 36.6%	21 51.2%	13 31.7%
合計	62 55.4%	62 55.4%	44 39.3%	23 20.5%	46 41.1%	44 39.3%	52 46.4%	35 31.3%

	土地を利用し、 公有地や川で 草木や魚をと れるようにす る	土地資源をア イヌ民族に返 還する	アイヌ民族に ついて研究す る組織を作り、 アイヌ民族出 身の研究者を 養成する	大学等に保管 されている遺 骨を国が慰霊 する施設を作 る	アイヌ民族と 国がアイヌ政 策を協議する 場を設ける	国会や道議会 にアイヌ民族 特別議席を設 ける	その他	N
青年	9 31.0%	3 10.3%	13 44.8%	5 17.2%	8 27.6%	5 17.2%	4 13.8%	29 100.0%
壮年	14 33.3%	10 23.8%	17 40.5%	10 23.8%	17 40.5%	12 28.6%	11 26.2%	42 100.0%
老年	13 31.7%	11 26.8%	15 36.6%	12 29.3%	17 41.5%	22 53.7%	13 31.7%	41 100.0%
合計	36 32.1%	24 21.4%	45 40.2%	27 24.1%	42 37.5%	39 34.8%	28 25.0%	112 100.0%

などのように、青年層または一部の壮年層の中で、アイヌ民族に対して何らかの特別な便宜をはかることに関して、それが逆差別になり、かえってアイヌ民族の立場を悪くするおそれがあるという考えが強い。

第6節 差別の経験

最後に、差別の経験についても触れておく。ここでは、学校、職場、結婚という3つの段階において、アイヌ民族であることを理由に不快な思いをしたことがあるかどうかをみていくことにする¹⁾。

学校段階では、老年層において、差別やいじめをうけた経験を挙げる者が多い。「ア、イヌが来た」と言われるものから、「朝鮮アイヌから湯気があがった」と言われた者、「ランドセルをナイフで切られた」という者など、アイヌ民族の貧困も相まって、クラスの少数派であるアイヌの子どもたちが和人からいじめを受けることが多かったようだ。なかには、教師にいじめられた、アイヌ同士でいじめをしていたという話もあった。

壮年層や青年層でも、学校時代のつらい思い出として差別を挙げている人がある。そのなかで、学校の授業がきっかけとなっていじめ、差別を受けたという者が2人いることは注目に値するだろう。

「やっぱり小学校、中学校、高校でも、やっぱり本に出てくるじゃないですか、アイヌ。(略)毛深くて汚くてって。(略)そういうことをみんなが言っても、先生は止めないですね。むかしの北海道の人たちのアイヌの人たちがどうのこうのって言っても、汚いだとか。なんて言うんでしょう、なんで汚いって言われるのって思っちゃいますけどね」(壮年層女性)

「社会科の授業で家系図を作るというのがあったんですよ。それで辿っていくうちに祖父の母親がどうもそれらしい名前だったので聞いてみたら、そうだった。(略)その授業以来、アイヌということでからかわれたりいじめられたりというのがありました。」(青年層男性)

先に見たように、アイヌ政策として学校教育にアイヌ民族のことを盛り込むことを要望する者は半数以上にのぼる。しかし、その学習内容によっては、それがかえってアイヌ差別の温床になる危険性をもっていることが指摘できるだろう。

仕事上では、直接的な差別を受けた人は壮年層で2人、老年層で2人であった。

「歓迎会の時に、私も何もまだ言われることもないのに、経理にアイヌを入れているんだ、と。」
(壮年層女性)

「やっぱり私がアイヌ民族だっていうことで、何でもあれ、無視して。のけ者っちゅうのかな。そういうのもあったけど。」(壮年層女性)

といった、嫌がらせを受けた者がいる。

結婚に際しては、学校時代と同様に、差別的な態度を受けた者が一定数おり、その割合は世代をくだっても改善していない（表1－19）。多くは、アイヌと和人の結婚において、和人の両親、あるいは親戚が反対するケースである。しかし、アイヌ民族同士の結婚においても、

「アイヌとアイヌが結婚したら子どもがかわいそうだとされました。（略）血が濃くなるって言われました。せっかく薄めたのに、何でまた濃くするって。」（壮年層女性）

「うちは家族みんなに反対されたよ。アイヌ同士の結婚だったから。アイヌ同士の結婚の反対理由が、混ざりっ子だとしても、アイヌ同士が結婚したら子どもたちが、なお（引用者注―血が）濃くなるから、止めろって母親にはとくに強く言われた。」（壮年層男性）

などというように、血が濃くなることを理由に反対されるケースがあった。また、反対されることを恐れてアイヌ民族であることを隠していたという者も多く、結婚と民族の問題は、まだ根が深いようである。

表1－19 結婚する際に苦労したこと

単位：人

	アイヌだということ で苦労した	経済的な問題で 苦労した	その他	とくに苦労 していない	無回答	合計 (既婚者)	未婚
青年	2 13.3%	1 6.7%	4 26.7%	6 40.0%	2 13.3%	15 100.0%	14
壮年	7 17.9%	4 10.3%	10 25.6%	14 35.9%	4 10.3%	39 100.0%	3
老年	7 17.1%	1 2.4%	12 29.3%	15 36.6%	6 14.6%	41 100.0%	0
合計	16 16.8%	6 6.3%	26 27.4%	35 36.8%	12 12.6%	95 100.0%	17

第7節 まとめ——世代間比較にみるアイヌの生活実態

ここまで、アイヌ民族の意識や生活実態を、世代間の比較に注目してみた。

教育については、多くの調査で明らかにされているように、現在も和人との間に進学率の差が残っていることがわかる。しかし、進学を断念した理由について踏み込んでみると、経済的な理由が主だった壮年層以上の世代と異なり、青年層では自分の意思で断念をしたという者が増えていた。

ただし、これは青年層において経済的な生活水準が上がったことを意味しているわけではない。年収をみてみると、青年層の平均年収は166.0万円と職業キャリアの前半であることを差し引いても低い水準となっている。

次に、民族意識については、若い世代ほど、意識しない者が増えている。また、老年層は民族としての意識が、若い頃のいじめや差別など、負の経験をともなって語られることが多いのに対し、若い世代では周りの雰囲気などから自然と芽生えていった、あるいは親から言われたなどというように、自然なものとして捉えられている点も特徴的であった。

アイヌ文化については、子どもの頃に経験していない「未経験率」が、老年層では24.4%であるのに、壮年層では40.5%、青年層では72.4%と上昇していることがわかった。日常の場におけるアイヌの文化が急激に失われていることが示されている。そのようななかで、アイヌ文化の経験も少なく、また現在の実践もあまりない青年層が、今後については関心をもっていることは注目できるだろう。「無関心者率」には世代差がほとんどなく、また、行政に対してもアイヌ伝統文化の保護を求める声は大きい。

そのような青年層は、アイヌ民族が日本国内において特別視されることを快く思っていない。行政への要望をみると、教育機会の確保や特別議席の確保といった、アイヌ民族へ特別な権利を与えようとする意見に対して賛同が少なく、明確な反対意見を述べる者も少なくない。和人と変わらない、一日本国民として生き、そのうえでアイヌの文化は保護していこうというのが、青年層の代表的な意見のようである。

一方、アイヌ差別については、若い世代になるにつれて経験者は減っているものの、少なからず存在していることがわかる。とくに結婚の場においては、世代を超えて2割前後の人が民族を理由として苦勞をしたと回答している。

絶対的な生活水準は向上しているものの、依然として和人と間に不平等がのこり、また、差別も存続しているのが、世代間比較からみえてきた現状であるといえる。

注

- 1) 差別については、第7章と第8章でより詳しく検討しているので、参照されたい。

(野崎剛毅)